

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391000017		
法人名	有限会社 草佳苑		
事業所名	グループホーム 大平		
所在地	熊本県菊池市大平 597番1		
自己評価作成日	平成22年2月19日	評価結果市町村受理日	平成22年4月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市南熊本3-13-12-205
訪問調査日	平成22年3月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ○ 愛・尊敬・感謝 ○ 入居者様に笑顔で安心して穏かに日常生活を送って頂くこと。 ○ ご家族様、地域の方々との信頼関係を大切にしていること。 ○ 運営推進会議においても、全てにおいて報告し、意見や協力を頂くようにしている。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>開設前よりの啓発が行き届き、地域の中での生活の拡充を図り、開設時に全員で考えた理念の実践に経験豊かな管理者を中心に職員が一丸となって取り組んでいる。この一年入居者を知る期間として長く一人ひとりに寄り添い、個々の思いを引き出し本人本位の生活を支援し、毎月担当職員による情報提供が家族との信頼関係となり、頻りに訪問されている。入居者もおもてなしの心を持ち、明るく生き生きとした表情に“お互い様”の生活であることを確認した。職員同士の意思疎通も良く、報・連・相に努め、責任あるケアに取り組んでいる。地域福祉や中山間地の活性化に対する代表者の思いがこのホームの開設となり、安全性に着目したハードと職員の持つケア力を活かしたホームである。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型サービスの意義を職員全員で確認。地域生活の継続支援に地域とのつながりを重視した理念を大切にしている。	法人理念である“愛 尊敬 感謝”のもと、事業所立ち上げ時にBS法により意見を出し合い、まずは自分達が出来ることかを掲げようと具体的な理念を掲げている。“笑顔のあるその人らしい生活”や“自立に向けた生活”と地域に根ざすとはどういうことを検討し、“地域とのつながりを大切にした生活”の3項目を職員の規範として、毎月定例会議で思いを共有し、近隣住民との交流から取組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的とまではいかないが、暖かい日には、散歩や買い物などに出かけ、地域の人たちと挨拶を交わしたりしている。毎週日曜日には地域の方が犬を連れて、ふれあい交流に来て下さっている。	開設前に地域住民へ向けた認知症ケア勉強会により地域住民との関係構築へ努め、散歩や買い物時の歓談や運営推進会議委員の地域行事等も活かしながら交流促進に取り組んでいる。日曜毎のボランティアの訪問や肥後にわかの予行練習等の訪問、近隣の子どもたちも遊びにきたりと訪問者も多く、今後は老人会への参加や地域高齢者が気軽に立ち寄れるホームにすることを目標としている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	H21・3・事業所の開設時、市地域包括支援センターの認知症サポーター養成講座を当事業所で開催。地域の方々に認知症ケアの啓発に努めたり、認知症アドバイザー養成講座の実習生の受け入れも積極的に行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	前回の運営推進会議で取り上げられた検討事項や、勘案事項について、その経過を報告し、一つ一つ積み上げていくようにしている。	開所3ヶ月目より開始した運営推進会議は、全家族へ参加案内を行い、行政、老人会長、民生委員、区長等の参加により2ヶ月毎に開催している。組織体制表・日常生活や活動報告等を報告し、質問事項等は次回の運営推進会議で説明している。ヒヤリ・ハット事例を集めて配布してはどうかとの意見から開設時よりの事例を配布し、道路の整備には家族の協力が得られる等サービス向上に反映させている。	地域委員からの情報が地域住民との交流促進に繋がったり、ボランティアとしての訪問等好意的であることが窺われる。自己・外部評価への取り組みは今回が初めてであり、運営推進会議の中で意見交換を行い、今後のホーム運営に活かされることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	認定更新時や、運営推進会議の案内状を持参する機会等に市の担当者へ、入居者の方の暮らしぶりなど伝え、連携を深めている。	運営推進会議の開催方法を相談したり入居状況や暮らしぶり等情報を発信し、菊池市独自の認知症アドバイザーの実習施設として協力している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者の方が外出しそうな様子を察知したら止めるのではなく、さりげなく声をかけたり、一緒についていくなど、安全面に配慮して自由な暮らしを支援。一人ひとりのその日の気分や状態を観察し、鍵をかけない暮らしを支えるようにしている。	拘束、虐待について話し合い、“入居者一人ひとりの行動や状態を把握しよう”を合言葉に拘束や施錠の無いケアを実践している。居室等全てが掃きだし窓であり、毎日1名の職員をホームのあらゆる事態に対応できるように配置し、その時間帯の職員は各窓を開ける等オープンなホームである。身体拘束廃止マニュアルを整備したところであり、ホームに即した勉強方法を考慮中である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会やミーティング等で虐待について話し合いを行い、暴言、無視、鍵等について注意を払い、虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現時点で権利擁護に関する制度について職員の学ぶ機会を設けていないが、今後は日常生活自立支援事業や成年後見制度を学び、必要性が生じた場合、それらを活用できるようにしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をとって丁寧に説明している。特に利用料金や起こりうるリスク、重度化や看取りについての対応方針、医療連携体制の実際などについては詳しく説明し、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族には、毎月1ヶ月間の報告書を提出。また来訪時や運営推進会議の折など機会のある度、常に問いかけ何でも言ってもらえるような雰囲気作りに留意している。出された意見、要望等はミーティングで話し合い反映するようにしている。	毎月医療面や連絡事項、生活の様子や今後の対応等請求書と共に各担当者が送付し、訪問時に意見・要望等何でも言いやすいような環境作りに努めている。運営推進会議にも多くの家族が参加されており、意見や要望は全員で話しあい、サービス向上に努めている。外部の苦情相談窓口は入居時に説明している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	事業所の運営に関しては、ミーティング、勉強会において話し合いを行い、職員の要望や意見を聞くようにしている。勤務形態等にも入居者の方、職員の意見を反映して柔軟に取り組むようにしている。	法人代表はホーム運営は管理者を中心にチームワークであたるよう指導しており、職員の提案等は全員で定例会議や日々の職員の意見・提案は記録に残し、提案事項は全員で是非を検討している。勤務体制も入居者の心身の状態や職員の希望等を取り入れ、報・連・相の徹底に取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も頻繁に現場に来て、利用者と過ごしたり、個別職員の業務や、悩みを把握するようにしている。処遇改善交付金も職員に還元、またキャリアアップにおいて資格取得に対し職員に助成金を出し、やりがいのある職場環境に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所外で開催される研修にはなるべく多くの職員が受講できるようにしている。また、それらの研修報告書を提出、職員全員に報告するようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他グループホームへの見学や相互研修、事例検討等を通して、事業所外の意見や経験をケアに生かしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の相談があった時は、必ずご本人に会って心身の状態やご本人の思いに向き合い、職員が本人に受け入れられるような関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでのご家族の苦労や今までのサービスの利用状況など、これまでの経緯について、ゆっくり聞くようにしている。また、ご家族の求めているものを理解し、事業所としてはどのような対応ができるか、事前に話し合いをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	早急な対応が必要な相談者には、可能な限り柔軟な対応を行い、場合によってはケアマネジャーや他の事業所のサービスにつなげるなどの対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人の思いや根本にある苦しみ、不安、喜びなどを知ること努め、暮らしの中で分かち合い、共に支えあえる関係づくりに留意している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人の日頃の様子や状態、職員の思いをきめ細かく報告、相談することで、本人をご家族と職員と一緒に共に支えていく協力関係に留意している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔から利用している美容院に行き続けている入居者の方や、昔、手伝っていた門徒でもあるお寺の皆さんに会いに行ったり、お経をあげてもらったり、また面会に来られたお友達の方々と、継続的な交流ができるよう働きかけている。	なじみの美容院やドライブ時に自宅へ立ち寄り、入居者の夢の話からお寺に出かける等入居者の話しに耳を傾け、「家に帰りたい」との思いに自宅で関係各位参加での担当者会議を開き、家族の協力を得て自宅で数日を過ごすことをプランに入れた入居者もおられる。家族や親類等の訪問も多く、友達との交流が途切れないよう心がけている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎日のお茶や食事の時間は職員も一緒に多くの会話を持つようにしたり、役割活動等を通して利用者同士の関係が円滑になるような働きかけをしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に帰られる場合、アセスメント、ケアプランや支援の状況を担当者会議で情報提供したり、職員が機会を作って訪問に行くなどし、支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のかかわりの中で声をかけ、把握に努めている。言葉や表情などからその真意を推し測ったり、それとなく確認するようにしている。意思疎通が困難な方には、ご家族や関係者から情報を得るようにしている。	アセスメントでの情報や日々職員は寄り添いながら一人ひとりに向き合い、言葉やしぐさ等から本人の要望に応えてる。入居者一人ひとりの行動パターンや表情・動作を把握することにこの1年取組み、毎月全職員で話し合っている。今後もセンター方式の心身の情報を職員の気づきでうめる意向である。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族にご本人の生活歴に関する情報の大切さを伝え、小さな事柄でも情報を伝えてもらい、それらを蓄積し、ご本人の全体像を把握できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活・心理面の視点や、できないことより出来ることに注目し、その人全体の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人やご家族には日ごろのかかわりの中で、思いや意見を聴き、反映させるようにしている。アセスメントを含め職員全員でモニタリング、カンファレンスを行っている。	本人・家族の意向を確認し、この一年観察の期間として、全員でのアセスメント・カンファレンスにより、“今”を視点においたプランを作成している。長・短期目標や認定更新等にプランを見直す意向である。	自宅復帰に向けたカンファレンス等個々の自立した生活を支援したいとの思いが介護計画に反映している。今後も心身状態の変化や予防的な観点からも家族との話し合いや職員の観察力がプランに反映することを期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	勤務開始前記録の確認、申し送りなど職員間の情報共有を徹底している。個別ファイルを用意し、日々の暮らしの様子等を記録している。また個別に、食事・水分量・排泄・バイタル等を行い、身体的状況を記録している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人、ご家族の状況に応じて、通院や送迎等必要な支援は柔軟に対応し、個々の満足度を高めるよう努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議に地域の民生委員・区長・老人会長、地域包括支援センターの職員の参加により、周辺情報や支援に関する情報交換、協力関係を築いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人やご家族の希望するかかりつけ医となっている。また、受診や通院はご本人やご家族の希望に応じて対応している。基本的には家族同行の受診となっているが、不可能時には職員が代行するようになっている。	入居時に本人・家族の意向を確認しこれまでのかかりつけ医の受診を支援している。家族による対応が困難な方について話し合いの後、ホーム協力医へ移行をしている。健康面については、入居者の日頃の生活の様子とともに、担当職員が手紙にて家族に知らせ情報を共有しながら一人ひとりを支えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、常に利用者の健康管理や状態変化に応じた支援を行えるようにしている。看護職員がいない時間は、介護職員の記録をもとに確実な連携を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人の支援方法に関する情報を医療機関に提供し、3～5日に1回は職員が見舞うようにしている。また、ご家族とも回復状況等情報交換しながら、退院支援を行うようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合における対応に関する指針を作成し、事業所が対応し得る最大のケアについて説明を行っている。	重度化に伴うホームの方針を家族に説明し、同意を得、その中で日常的な医療行為の必要性を退居の目安としている。本年度協力医の往診や24時間看護職員とのオンコール体制で家族の思いを支援したが継続的な医療行為の必要性により退居に至ったケースもあるが、重度化の入居者もホームで出来る最大限のケアを行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を得て、応急手当や蘇生術の研修を実施し、全ての職員が対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力を経て、避難訓練、避難経路の確認、消火器の使い方などの訓練を定期的(年2回)に行っている。	消防署の協力のもと年2回昼・夜間実際の時間帯で訓練を実施している。事前の地域住民への周知や職員駐車場を避難場所とする為、職員車両の移動先に場所を提供してもらうなど、近隣住民の支援により夜間訓練が可能になっている。	今後は火災に限らず地震や風水害についても対策や避難方法について、認識を統一した訓練の実施が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	援助が必要な時も、まずは本人の気持ちを大切に考えてさりげないケアを心がけたり、自己決定しやすい言葉かけをするように努めている。	職員は入居者に方言を交えながら自然な形で関わり接している。入居者も職員に対し安心した表情で会話し、日々の関わりが窺える。記録物を事務所で一括保管し、面会簿も常時設置せずホーム管理のもと訪問時に記入を依頼している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員側で決めたことを押し付けるようなことはせず、複数の選択肢を提案して入居者の方一人ひとりが自己決定できるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な1日の流れは持っているが、一人ひとりのペースを大切に、それに合わせた対応を心がけている。その日の体調、様子を見ながら、本人の希望を尋ねたり、相談しながら過ごしていただいている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の生活習慣に合わせ支援をし、また、行事等日ごろからも化粧やおしゃれを楽しんでもらえるよう取り組んでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立を入居者の方々と相談しながら決めるようにしている。また、調理、片付け等も一緒に行い、食事を入居者の方、職員と同じテーブルを囲んで楽しく食事できるよう雰囲気作りも大切にしている。	職員が入居者の好みを聞きながら、献立を作成しているが、冷蔵庫の材料や差し入れ野菜を利用しながら、柔軟にメニューを変更している。入居者も茶碗拭きや野菜の皮むき・味見などできることを手伝っている。食事制限にもドクターの意見や入居者の意向を尊重しながら、摂取量や味付けに配慮している。天候のよい日は、庭でシートを広げておやつを楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立の栄養バランスに配慮し、食事量も一人ひとりの体調と一日の摂取量を把握している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で出来る方は声かけ見守りをし、できない方に関しては毎食後のケアを行い、嚥下障害による肺炎の防止などにも努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自尊心に配慮し、入居者の方の様子から察知したり、排泄チェック表で尿意のない方にも時間を見計らって誘導しトイレで排せつできるよう支援している。身体機能に応じて手を差し伸べ、全ての方がトイレで排せつできるよう支援している。	排泄チェック表を活用したり、個々の表情やしぐさを察知し声かけや誘導を行っている。全ての入居者にトイレでの排泄を支援し入居者の自信や喜びに繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄パターンを記録し、便秘の方には牛乳やお茶など十分な水分補給や繊維質の多い食材を提供、また、運動にも心かけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員が一方的に決めず、入居者の方のその日の希望を確認し、気持ちよく安心して入浴できるよう支援している。	毎日入浴準備を行い、入居者の希望に応じ週3回を目安に入浴を支援し、ゆっくり入ってもらよう配慮している。失禁時にはその都度対応し、拒否の方へもタイミングや、巧みな言葉かけにより清潔保持に努めている。両側から介助できる浴槽で身体レベルに応じては、2名体制で安全な入浴を支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	なるべく日中の活動を促し、生活リズムを整えるよう努めている。また、一人ひとりの体調や表情、希望等を考慮して、ゆっくり休息がとれるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬ファイルの作成や処方箋のコピーをケース毎に整理し職員が内容を把握できるようにしている。服薬時はご本人と職員が一緒に名前を確認し、きちんと内服されたか確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	得意分野で一人ひとりの力を発揮してもらえよう、お願いできそうな仕事を頼み、感謝の言葉を伝えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型・季節性のインフルエンザの流行により、冬場外出を控えている。但し、地域のお店に買い物に行ったり、散歩等に出かける支援を行っている。	本年度インフルエンザの影響により外出の機会は少なかったようだが、敷地内の散歩、ドライブを兼ねスーパーでの食材の購入や梅雨時期のコインランドリー使用、家族による受診時の外出支援・正月の帰省などが行われた。	個々の入居者の思いを再度確認し、家族と協力しながら1対1の外出や全員で出かけられる場所をリサーチし入居者の楽しみにつなげることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族よりお金を預かり、事業所で管理している。地域のお観音様への外出時は少額のお金を持ってもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族、友人、知人からの手紙や電話を歓迎し、また、ご家族や、友人などに電話しやすい雰囲気作りを心かけている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	グループホーム全体バリアフリーになっており、入居者の方々が、安全に安心して行きたい所へ移動でき、また、皆さんと一緒にフロアで居心地よい共用空間で過ごせるよう、五感刺激への配慮に気を配り支援している。	真新しい建物はバリアフリー化され、広々としたリビングや、段上がりの和室など入居者がゆっくり寛ぐ場所が提供されている。職員が持ち寄った雛段飾りや季節の花が生けられ異臭や騒音のない空間で入居者と職員の会話が弾み、終日笑いの絶えない明るいホームである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれのホール、フロアには、ソファを置き、絵画や花などの装飾で居心地のよい空間を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具やタンス、写真や思い出の品々が持ち込まれ、それぞれの入居者の方の居心地のよさに配慮している。	採光や風通り、有事の際の避難を考慮し、掃き出し窓を取り入れた居室は、日当たり良好で清潔に保たれ入居者の安らぎの場となっている。鏡台・タンス・思い出の写真など馴染みの品が持ち込まれ季節の衣類の入れ替え等に家族の協力が得られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ご本人にとって、何が分かりにくいのか、また、どうしたら本人の力でやっていただけるか、を追求し状況に合わせ環境整備に努めている。状態が変わって混乱等が生じた時は、職員で話し合い不安や混乱材料を取り除き自立支援につなげている。		